

先島諸島における野生化したインドクジャクの分布と現状について

田中 聡* · 嵩原 建二*

Distribution and Present Status of Feral Common Peafowls *Pavo cristatus* in the Sakishima Islands, the Ryukyu Islands

Satoshi TANAKA* and Kenji TAKEHARA*

はじめに

琉球列島は、複雑な地史的変遷の結果、陸生生物で固有種が多いことや大陸ではすでに絶滅してしまったような生物が遺存種として生きながらえていることなどにより、きわめて特異な生物相を形成している。亜熱帯では世界的にも稀な湿潤気候の下、それぞれの島は大きさ・地形・土壌等の違いに起因した独自の生物群集を支えている。このような生物群は学術的に貴重であるばかりでなく、最近のエコツーリズムの隆盛をかんがみると、観光資源としての潜在的価値も高い。しかしながら、沖縄県における近年の動植物の減少は著しい。森林伐採・埋め立て・人工護岸の構築などの生息地の破壊が動植物の減少をもたらしてきたことは明らかであるが、それに加えて近年強い懸念が抱かれているものに他の土地から人為的にもたらされた外来種（移入種）の問題がある。外来種は導入された場所の生物多様性や人の生活に影響を与えることが多い。沖縄県ではウリ類の害虫となったウリミバエや捕食をとおしてヤンバルの固有種を駆逐する勢いのジャワマングースなどが、その顕著な事例である。このような外来種問題は国際的にも大きな注目を集めており、国際自然保護連合（IUCN）では外来種による生物多様性の減少を防止するためのガイドラインを策定している（Invasive Species Specialist Group, 2000）。また、国内にお

いても、全国の外来種の現状を整理した『外来種ハンドブック』が昨年秋に刊行された（日本生態学会編、2002）。しかしながら、その中には本稿で取り上げる先島諸島において野生化したインドクジャク *Pavo cristatus*（これ以後クジャクと表記する）についてはリストにさえ触れられていない。

私たちは沖縄県立博物館総合調査の一環として小浜島を訪れ、クジャクが島内全域に高密度で生息していることを確認し、さらに、先島諸島の他の島にもクジャクが野生化しているという情報を複数の人から耳にした。小浜島での調査結果の詳細は2004年3月に刊行予定の『小浜島総合調査報告書』において公表する予定である。しかし、外来種の問題はできるだけ速やかな対応が効果的であるため、先島諸島において野生化したクジャクの現状を明らかにすることを目的にアンケート調査をおこなった。本稿は、アンケート調査の結果を整理し、先島諸島のどの島にクジャクが野生化ないし定着しているのかを明らかにすることに加えて、これ以上分布を拡大させないよう注意を喚起するとともに、関係者による速やかな対応を促すことを目的とする。

方法

今回調査対象としたのは八重山諸島では石垣島、竹富島、小浜島、黒島、鳩間島、新城島、西表島、波照間島、与那国島、宮古諸島

* 〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

では宮古島、池間島、伊良部島、池間島、来間島、多良間島である。これらの島で自然観察に携わっている住民や学校に対して電話で聞き取り調査をおこない、野生化しているクジャクが「いる」という場合、郵送あるいはファックスでアンケート用紙と先島諸島の地図を送付し、回答を依頼した。アンケートの回答は2002年12月20日から2003年1月21日に回収した。アンケート調査の質問項目は以下の通りである。

1. あなたの島で、あなた自身が野生化したクジャクを目撃されたことはありますか。
2. 1. で「はい」とお答えいただいた方にお聞きします。クジャクを目撃されたのはいつ頃からいつ頃までですか。(わかる範囲でけっこうです)
3. あなたの島で、あなた以外の方が野生化したクジャクを目撃したということを知られたことがありますか。
4. 3. で「はい」と答えられた方にお聞きします。クジャクを目撃されたのはいつ頃だと聞かれましたか。(わかる範囲で結構です)
5. 1. で「はい」と答えられた方にお聞きします。クジャクが島に入った経緯をご存じですか。ご存じでしたら、その経緯を簡単に記入してください。
6. クジャクは現在でも目撃されますか。
7. クジャクは年々数を増やしているようですか。
8. できたら、クジャクを目撃情報を裏の地図に●で示してください。

さらに、石垣島において野生化したクジャクが学校の飼育個体の逸走によるとの情報があったため、石垣島のすべての小学校にクジャクの飼育について電話による聞き取り調査をおこなった。

結果

今回の調査では下地島、水納島、嘉弥真島、外離島および内離島の情報は得られなかった。また、島全域が観光地になっている由布島は

調査対象から除外した。電話による聞き取り調査の情報件数は少なかったが、宮古諸島では池間島(情報件数2)、来間島(1)、多良間島(2)、八重山諸島では竹富島(1)、鳩間島(1)、波照間島(1)でクジャクが目撃されていなかった。その他の9島ではクジャクが目撃されていた(表1)。それぞれの島における生息状況を次に述べ、目撃地点を図1に示す。なお、文中に示す#を付した番号は表1の情報番号に対応している。

宮古島

宮古島では1997年からクジャクが目撃されており、現在も個体数を増やしている。島の中央部を中心に、東部と北部をのぞき広い範囲にわたって目撃されている。大野山林での目撃例が多く、現在10羽以上が生息している(#3)。城辺町「いこいの森」では2001年秋に13羽が目撃され、翌年の夏には4羽の雛が確認されている(#3)。少なくとも、「いこいの森」のクジャクは、近隣の小学校で飼育していたものが逃げ出したものらしい。なお、宮古島のクジャクは八重山諸島から持ち込まれたという情報があった。

伊良部島

島内の5校への聞き取り調査のうち、2校からはクジャクを目撃情報はなかった。しかし、宮古島在住の情報提供者(#3)と残りの3校からは目撃情報を得た。このうち2件は現在もクジャクがいることを示している。目撃地点は牧山公園に限られている。この島のクジャクは、数年前に南洋漁業の漁師が学校に寄贈した2番のクジャクを2000年頃に逃がしてしまったものが野生化したもので、現在も個体数を増やしているという。

石垣島

1994年からクジャクを目撃情報があり、6件が現在も生息を確認しており、そのうち3件は個体数が増加していることを示している。15の目撃地点の大部分は於茂登岳付近以南に

表1 インドクジャクの生息状況についてのアンケート調査結果

| 島名 | 質問番号 | | | | | | | 情報番号 |
|----------|----------------------|---------------|----|--------------------|---|-----|-----|------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | |
| 宮古島 | はい | 1997/8~02/3 | はい | 97/?~02/12/2 | ペットとしての飼育 | はい | はい | 1 |
| | はい | 02/5上旬 | | | | | | 2 |
| | はい | 1997/4頃~ | はい | | 八重山から持ち込まれた。 | はい | はい | 3 |
| 伊良部島 | | | はい | 2~3年前 | | | | 4 |
| | いいえ | | はい | 02/7頃 | 数年前に、遠洋漁業の漁師から学校に寄贈された。 | はい | はい | 5 |
| | いいえ | | はい | 02/12 | 小学校で飼っていたものが逃げた。 | はい | 不明 | 6 |
| | はい | | | | | | | 3 |
| 石垣島 | はい | 1996年以来 | はい | 不明 | 小浜島から持ち込まれただろう。 | はい | いいえ | 7 |
| | はい | 1994年~02/12 | はい | 1994年頃 | 小浜島のリゾート施設より小中学校に愛玩用として持ち込まれ、それが小屋から逃げてしまった。 | はい | はい | 8 |
| | はい | 不明 | はい | 不明 | 小浜島のリゾート施設が飼っていたものが島で野生化し、それが他の島に持ち込まれた。 | はい | 不明 | 9 |
| | はい | 01/5~02/8 | はい | 02/11頃 | 小浜島で飼育していて増えたものが小学校などに寄贈された。檻から逃げて広がったと聞いた。 | はい | はい | 10 |
| | はい | 00/4頃から | はい | 02/12頃 | | はい | いいえ | 11 |
| | いいえ | | はい | 01,02年 | | いいえ | いいえ | 12 |
| | はい | 01/6~02/12 | | | | はい | はい | 13 |
| 小浜島 | 現地調査により多数生息していることを確認 | | | | | | | 14 |
| 黒島 | はい | 2000年頃~ | はい | 2000年以前から | 小浜島のリゾート施設より、数羽が鑑賞用に持ち込まれ、それが逸走した。 | はい | はい | 15 |
| | はい | | | | | | | 8 |
| 新城島(上地島) | はい | | | | | | | 15 |
| | はい | | | | | | | 7 |
| | はい | | | | | | | 8 |
| | はい | 1992/5~ | はい | 不明 | 小浜島のリゾート施設を経営する会社がこの島に持ち込んだ。 | はい | 不明 | 16 |
| | はい | 1969/4~ | はい | 1969/4~ | 昭和40年代にリゾート関係の企業がこの島に宿泊施設を建設。鑑賞用として、当初は柵で囲い飼育していたが、管理者がいなくなり野生化した。現在200羽程度生息していると予想される。この島から小浜島のリゾート施設(同じ会社)に持ち込み、そこから逸走したものが小浜島で野生化した。 | はい | はい | 17 |
| 新城島(下地島) | はい | | | | | | | 8 |
| | はい | | | | | | | 10 |
| 西表島 | はい | 02/4頃(1羽) | はい | 1990頃1羽 1998頃1羽 | 由布島の観光施設か小浜島から持ち込まれた。 | いいえ | | 19 |
| | いいえ | | はい | 01/10頃 | 由布島の観光施設で放し飼いにされていたものが逃げだし、西表島に渡ったことがあった。2001年10月12日に飼育小屋が完成し、その後は逃げた個体はいないようだ。2002年10月現在、16羽が由布島的小屋の中で飼育されている。 | | | 20 |
| 与那国島 | はい | 02/4に居住した時以来 | はい | 1994年以降 | 10年ほど前に学校で飼育されていた一羽が、8年ほど前に台風で檻が壊れ、逃走。その後、山中、牛舎で見られるようになった。 | はい | はい | 21 |
| | はい | 1994/10~02/12 | はい | 1994~02/12 | 1994/8/19に襲来した台風16号により与那国町内の小学校で飼育されていたクジャク2羽の小屋が破壊し、逃走した。また、町民が飼育していたクジャクがその年の台風前に1羽逃走した。 | はい | はい | 22 |
| | はい | 01/3~02/11 | はい | 01/3頃 | 学校施設で飼育していたものが逃走。 | はい | はい | 23 |

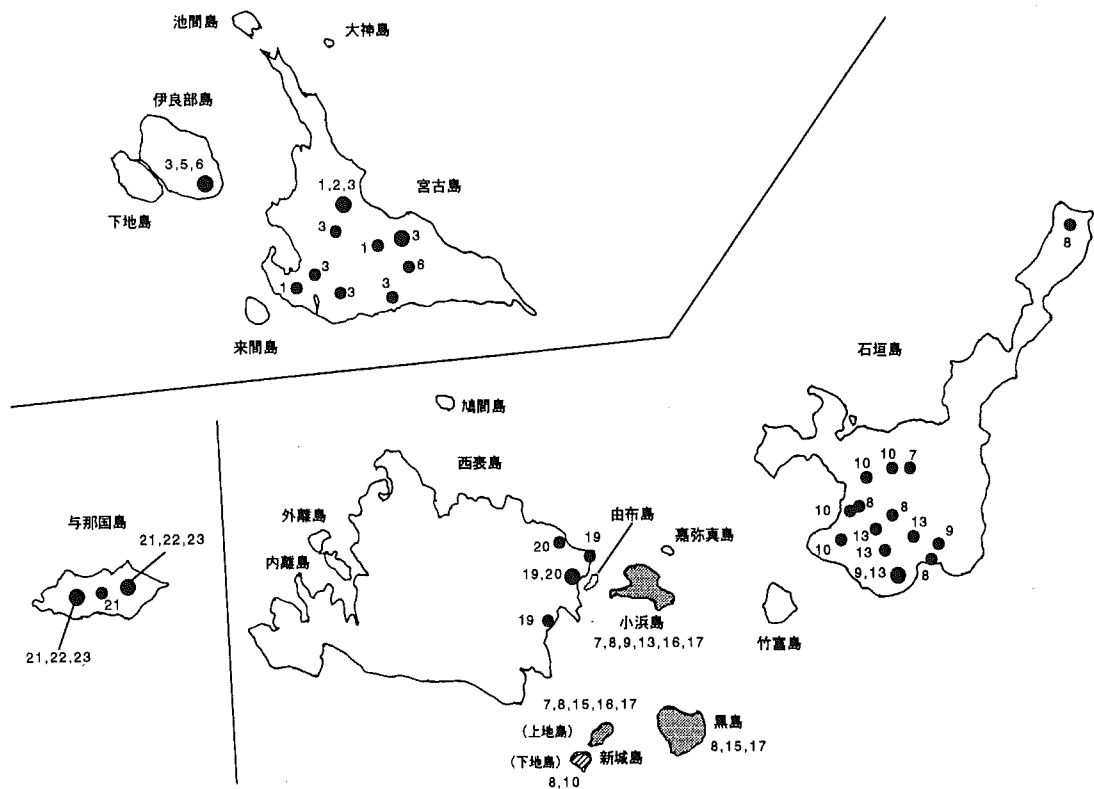


図1 先島諸島におけるインドクジャクの見撃地点。黒丸は1回の、大きい黒丸は複数の見撃情報があった地点を示す。黒丸に付した番号は表1の情報番号に対応する。影で示した島はクジャクが島全域に分布することを示し、斜線で示した島は見撃地点が明確でないことを示す。

散らばっているが、平久保半島の平野付近でも見撃例があった。移入の経緯については、4件が小浜島からの持ち込みをあげており、それが小学校で飼育され、飼育施設から逃げ出したという。小学校への聞き取り調査の結果、20校のうちクジャクを飼育しているのは2校のみであった。そのうち1校では保護者から寄贈された1雄が逃げ出したが、再び戻ってきたものを捕らえたという。もう1校では現在2羽飼育しており、以前、別の小学校へ寄贈したことがあり、また、逃げ出したことがあったという。残念ながら、この小学校からクジャクを譲り受けたという情報は他の学校からは得られなかった。

小浜島

小浜島では直接野外調査をおこなったため、

聞き取り調査やアンケート調査はおこなわなかったが、ほかの島に在住する6名から地図上に記入するなどの報告があった。

田中は昨年の9月9日に小浜島のほぼ全域でロードセンサスをおこない、10時20分から13時3分までの間、単独から6羽の群まで、合計29羽をカウントした。クジャクの分布は部落や港付近をのぞくほぼ全域にわたっており、爬虫類などの定量調査のために入った大岳の林内においてもクジャクが確認された。他の島で多数のトカゲ類が見撃されるような場所で見撃されたトカゲ類がきわめて少なかったということを指摘しておきたい。

黒島

1980年代後半に、小浜島のリゾート施設から数羽が持ち込まれ、それが逃げ出し野生化

したという。現在、島内に数百羽レベルで生息しているらしい。

新城島（上地島・下地島）

上地島在住の情報提供者（#17）をはじめ、石垣島・黒島在住の情報提供者（#7、8、15、16）からも、上地島全域にクジャクが多数生息するとの情報を得た。移入の経緯については、小浜島から持ち込んだという指摘もあったが（#16）、上地島在住の情報提供者からは、最初にクジャクが持ち込まれたのはむしろ上地島であり、そこから小浜島に持ち込まれたという具体的な指摘があった。この情報提供者によれば、島の中では野菜なども網で囲わなくてはことごとくクジャクの被害を受けるといふ。また、従来普通にみられ、島民の食卓にのぼった野草類がきわめて少なくなり、キシノウエトカゲなどのトカゲ類、アサギマダラ・オオゴマダラなどの蝶類、メジロ・シロガシラなどの鳥類の姿も激減したという。また、島民が捕らえたクジャクがヤシガニを食べていたこともあるという。

下地島では、島の牧場関係者によればクジャクはみられないということであった。しかし、石垣島在住の情報提供者（#8、10）によれば、時期や正確な場所の情報はなかったが、この島でも目撃されたことがあるという。個体数が少ないようであるので、目撃された個体は上地島から飛来した可能性が高い。

西表島

クジャクが目撃情報2件は、いずれも島の東部の海岸近くである。1990年および1998、2001、2002年と目撃された年に隔たりがある上、目撃数も少ないことから、1990年に目撃されたものが定着している可能性は低いものと思われる。移入の経緯としては、小浜島から持ち込まれたか由布島の観光施設から逃げ出したということである。由布島の観光施設では2001年10月に飼育小屋を造り、その中でクジャクを飼育しているため、2002年4月頃に目撃されたクジャク（#19）は、小浜島か

らのものである可能性が高い。

与那国島

3件の情報は、いずれもクジャクが現在も島に定着し、個体数を増やしていることを示している。クジャクをどこから持ち込んだかは不明だが、10年ほど前から学校で飼育していたものが1994年の台風16号によって壊れた小屋から逃げ出し、それが繁殖したものであるらしい。目撃地点は3カ所に限られている。

考察

今回の調査では、アンケート対象者も少なく、また、情報提供者間の重複情報を特定することができなかったが、先島諸島におけるクジャクの分布や生息状況をおおよそとらえることができた。調査対象とした宮古諸島6島のうちの2島、八重山諸島9島のうちの6島でクジャクの野生化が確認された。そのうち、小浜島・新城島（上地島）・黒島では現在きわめて高密度で生息しており、西表島をのぞく7島で定着し、個体数を増加させている状況が明らかとなった。インドクジャクはパキスタン、インド、スリランカ、ネパール、バングラデシュなどが原産地で、食性の幅が広く、野生のものは穀物、植物の芽や種子・果実などの植物質のものから、昆虫、マイマイ、トカゲ類や小型のヘビ類、小型哺乳類といった動物まで捕食する（Del Hoyo et al., 1994; Long, 1981）。クジャクが高密度で生息している小浜島では、定量的な調査の結果、トカゲ類などの小動物がきわめて少なく、新城島（上地島）でもキシノウエトカゲなどのトカゲ類や蝶類が激減したということがわかった。たとえクジャクだけが原因でなくても、これらの動物がクジャクに捕食されている可能性はきわめて高い。また、新城島（上地島）で小鳥類が少なくなったのは、穀物や果実等の餌をめぐる競争の結果、クジャクに排除されたのかもしれない。直接的な資料はないが、このような状況をふまえると、クジャクは島々の生物多様性を脅かす侵略的外来種となつて

いる可能性が高い。

先島諸島のクジャクの導入経路は2通りであった。一つは南洋漁業の漁師が持ち帰り、学校に寄贈したものが逸走し野生化したという伊良部島の例であり、もう一つは新城島(上地島)に建設した宿泊施設で飼育したクジャクが逃げ出し野生化した例である。上地島のクジャクは、その後小浜島に導入され、そこで野生化し、さらに黒島・石垣島に導入されたものが飼育施設から逃げ出し野生化した。伊良部島でクジャクが逸走したのは2000年頃であるため、宮古島や与那国島のクジャクも小浜島等から導入されたのだろう。

今回、少なくとも4つの学校でクジャクを逸走させたということがわかった。台風で小屋が壊れたなど、意図的でないにせよ、逸走させてしまったということは結果的に十分な管理ができなかったことを示している。クジャクは美しい鳥であるし、人に危害を与えるようなこともないだろう。また、動物の飼育は、子供たちに生命尊重の態度などを育成する上で大きな役割を担っている。しかしながら、どのような動物であれ、その飼育管理は徹底しなければならない。そのような徹底した管理姿勢を通して、子供たちに本来の自然を残すことの意義を伝えることは学校の重要な役割だろう。

今回のアンケート調査では、伊良部島にウサギが、石垣島にキジ、ホロホロチョウ、リスザルが野生化している(いた)という情報もあった。クジャクの問題はまさに一つの事例にすぎない。外来種問題の予防や解決のためには、教育センターなどの研修機関での教職員の研修、学校における生徒への正しい知識の教示、博物館等での一般市民への普及啓発、行政担当部署による駆除事業や飼育動物管理者に対する注意の喚起等が並行しておこなわれなければならないだろう。そのためには、機関の間の連携が必要である。さらに、

同じ問題意識をもち活動している民間団体とも連携できるような体制がつけられることが望ましい。

謝 辞

本報告の主要な部分を構成するアンケート調査については、井口修・池原賢・江川義久・大泊智明・小野寺至・親泊宗正・黒島和男・島達也・島仲信良・庄山守・城間恒宏・新城貞美・杉本和信・砂川栄喜・田盛高司・仲底善章・福仲用治・藤本治彦・宮良清晃・村田行・本成尚の各氏にご協力いただいた。新城安哲・藤本治彦両氏にはさまざまな情報をいただいた。また、石垣市内の全小学校および池間中学校・伊良部中学校、伊良部小学校、来間中学校、多良間中学校、竹富小学校、鳩間中学校、波照間中学校、久部良中学校、パナリ牧場および比嘉英秀氏には電話での聞き取り調査にご協力いただいた。文献については川上和人・大河内勇両氏にお世話になった。

以上の方々に対し、厚くお礼申し上げる。

文 献

Del Hoyo, J., A. Elliott and J. Sargatal (eds.) 1994. *Handbook of the Birds of the World*. Vol. 2. Lynx Edicions, Barcelona.

Invasive Species Specialist Group. 2000. IUCN guidelines for the prevention of biodiversity loss caused by alien invasive species. (<http://iucn.org/themes/ssc/pubs/policy/invasivesEng.htm/>) (日本語訳が『外来種ハンドブック』に所収)

Long, J. L. 1981. *Introduced Birds of the World*. David & Charles, London.
日本生態学会(編). 2002. 『外来種ハンドブック』地人書館, 東京.